

鹿野城跡発掘調査報告書

町民憩いの場整備事業に伴う発掘調査

1995.3

鹿野町教育委員会

序 文

近年における地域開発の波は、旧来の風景を大きく変えつつあります。わが鹿野町もその例にもれず、土地改良事業、建設事業等が行われています。これらの開発事業により、貴重な埋蔵文化財が失われつつあり、今後これらの文化財をどう保護していくかが大きな課題となっております。

ここに報告する鹿野町内遺跡の発掘調査は、町民憩いの場整備事業に伴う『鹿野城跡発掘調査』です。いずれも関係各機関と協議・調整を図った結果、『鹿野城跡』は記録保存を前提として後世に残すこととなったものです。調査の記録としては必ずしも満足すべきものではありませんが、鹿野町ひいては鳥取県東部の中・近世史を解明するうえで貴重な資料を得ることができました。今後本書が、町民をはじめ関係各位に活用され文化財保護意識の高揚に役立てていただければ幸いです。

最後になりましたが、この発掘調査ご指導いただいた鳥取県教育委員会文化課・鳥取県埋蔵文化財センターのみなさま、そして地元関係者のみなさまの格別のご協力に対して深く感謝の意を表すものであります。

平成7年3月

鳥取県気高郡鹿野町教育委員会
教育長 砂川正美

調査関係者一覧

調査を実施するにあたり、鳥取県教育委員会をはじめ地元関係者の方々より多大なるご協力賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

- 調査主体 鹿野町教育委員会
教 育 長 砂川正美
次 長 児島寛一
社会教育主事 清水保朝
- 調査指導 鳥取県教育委員会文化課
鳥取県埋蔵文化財センター
- 調査員 清水保朝
- 調査補助員 原田義夫、西浦 修
- 作業員 山名信子、土橋富美子、細谷富江、永原千鶴子
鈴木フミ子、西浦くにゑ、原田 節、小林 健
谷口恵子 (敬称略、順不同)
- その他の協力者 鹿野町企画課、山東建設(株)

例 言

- 1, 本報告書は、平成6年度に鹿野町教育委員会が、町民憩いの場整備事業に伴う事前調査として、鹿野町鹿野字二の丸及び西茶苑小路、薬研堀で実施した事前の発掘調査の記録である。
- 2, 本書で用いた方位は磁北を示し、レベルは海拔標高である。
- 3, 遺構の実測は清水が行った。
- 4, 遺物の整理及び実測は、清水が行った。
- 5, 遺構及び遺物のトレースは、清水が行った。
- 6, 遺構及び遺物の写真撮影は、清水が行った。
- 7, 本書の執筆は、清水が行った。
- 8, 出土遺物及び実測図等は、鹿野町教育委員会で保管する。

本文目次

序 文

調査関係者

例 言

第I章 調査の経緯 1

　　第1節 調査に至る経過 1

　　第2節 発掘調査の経過 1

第II章 位置と環境 1

　　第1節 地理的環境 1

　　第2節 歴史的環境 3

第III章 調査と結果 4

　　第1節 調査の概要 4

　　第2節 調査の結果 4

第IV章 ま と め 13

挿図目次

挿図 1	2	挿図 7	9
挿図 2	5	挿図 8	11
挿図 3	6	挿図 9	12
挿図 4	7	挿図10	13
挿図 5	7	挿図11	14
挿図 6	8		

図版目次

図版 1	調査区全景（東側より）	図版10	A—T 2 検出石垣（隅石中心）
図版 2	調査区全景（南側より）	図版11	B—T 1 検出石垣（東立面）
図版 3	A工区検出石垣全景	図版12	B—T 1 検出石垣（隅石中心）
図版 4	B工区検出石垣全景	図版13	B—T 1 検出石垣（平面）
図版 5	A T—1 検出石垣（東立面）	図版14	C—T 1 土層断面（A—A'）
図版 6	A—T 1 検出石垣（平面）	図版15	C—T 1 土層断面（B—B'）
図版 7	A—T 2 検出石垣（東立面）		
図版 8	A—T 2 検出石垣（南立面）		
図版 9	A—T 2 検出石垣（平面）		

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

平成6年度、鹿野町民憩いの場整備事業に伴い、開発予定地域の鹿野城跡一帯(公有地)の埋蔵文化財の有無及び遺跡の範囲について、鳥取県埋蔵文化財センター・鹿野町教育委員会、鹿野町企画課、山東建設(株)で協議を行い、緊急に発掘調査を行うこととなった。

この城は、鹿野の南・妙見山に築かれた山城で、周りには北側に柄杓目遺跡をはじめ、南側には口水谷古墳群など数多くの遺跡・古墳が点在している。平成6年度の調査は、平成6年10月3日～12月27日の期間で行い、開発部局と遺跡の保存との調整を図ることと、遺跡の性格と範囲を確認することを目的として試掘調査を実施した。

第2節 発掘調査の経過

近年行われた鹿野城跡に関する発掘調査の報告書について振り返ってみると、『鹿野城跡調査概報』(昭和56年度調査実施)では、城跡内に郷土資料館の建設が計画され、早急にその対応に迫られ城跡城内部分について調査を実施することとなった。

それによると、現況の発掘調査においては、山城部、山麓部、城下町部に調査区域を分け、それぞれ石垣・礎石の検出、土壘・曲輪などの検出・確認を行ったようだ。また、現況の発掘調査以外では、『因伯古城跡図志』をはじめ(その他9点)近世の主な文献などの調査も併せて行われた。これにより鹿野城跡の大まかな城の形態が把握されたようだ。

続いて、近年行われた『鹿野城跡二之丸遺跡発掘調査報告書』(平成元年度調査実施)では、学校給食共同調理場の建設が計画され、早急にその対応に迫られ城跡城内部分(二之丸)について試掘調査を実施することとなった。調査の結果、遺構が検出され、亀井時代の城の拡張以前の古い土壘あるいは土壘の基礎部ではないかと推定された。

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

鹿野町は鳥取県東部に位置し、東は鳥取市、西は青谷町及び三朝町、南は、河原町及び

1. 鹿野城跡
2. 柄杓目遺跡
3. 末用遺跡
4. 中峰遺跡
5. 出百姓遺跡
6. 寺谷遺跡
7. 古仏谷遺跡
8. 会下谷遺跡
9. 奥会下谷遺跡
10. 天王遺跡
11. 寺内京南遺跡
12. 寺内廃寺遺跡
13. 宮谷遺跡
14. 谷田遺跡
15. 西中園遺跡
16. 木梨遺跡
17. 寄馬場遺跡
18. 東中園遺跡
19. 石ヶ谷遺跡
20. 宮方遺跡
21. 神越谷古墳群
22. 閉野1号墳
23. 口水谷古墳群
24. 出百姓古墳群
25. 釜子谷1号墳
26. 小別所古墳群
27. 馬池古墳群
28. 寺内古墳群
29. 西中園古墳群
30. 重山古墳群
31. 梶掛古墳群
32. 午房山城跡
33. 金剛城跡
34. 益谷城跡
35. 露谷城跡
36. 狗戸那城跡
37. シンジャク城跡
38. 觀音山城跡
39. 藤山城跡



挿図1 鹿野町内遺跡地図

三朝町、北は気高町を隔てて日本海に臨み、1市3町に隣接する。町全体の面積は、52.83km²で、その87%を山林・原野が占め、平野は中国山地から北に離れた独立峰である『鷺峰山』を水源とする3本の河川、河内川、水谷川、末用川に沿って広がっている。

鹿野町は、河内川・水谷川の合流する扇状地に開けた城下町で、調査を行った鹿野城は鷺峰山から北に伸びる山麓の北端の城山（妙見山 標高150.3m）山頂に三層の天守閣を構えていたと思われる。

第2節 歴史的環境

鹿野町内には現在11の城跡と1つの陣跡が残っている。このうち鹿野地区には今回調査を行った鹿野城をはじめとして3つの城跡と陣跡が1つある。鹿野城がはじめて歴史に登場するのは、天文13年（1544）のことと、尼子晴久（出雲）の3万余の大軍に囲まれて、志加奴入道が300余の手勢と共に、この地で壮絶な討死をしたとされている。また、いろいろな伝承があり創建年代は不明であるが、当初は、国侍志加奴氏の代々の居城であったと伝えられている。

鹿野は、中世末から近世初頭にかけ大きな歴史的変遷により、国衆・地侍などの拠点として、また、因幡国と伯耆国とを結ぶ政治・経済・文化・軍事などの交通の要所として栄えた。

中世末から近世初頭にかけての鹿野城は、因幡の守護職山名氏の部将であった志加奴氏の時代に、伯耆よりの軍事的脅威に備える『山の手の要の城』であった。また、毛利氏の勢力が因幡におよんで、山名氏の人質をこの城にとどめ、毛利氏の部将が城番となった時代は、鳥取城の監視をする『目付けの城』でもあった。当初、妙見山の山頂付近を中心とした山城であったが、天正8年 羽柴筑前守秀吉が因幡に侵攻し、因幡方面統治のための主要な砦として鹿野城を攻略、その後亀井武蔵守茲矩らにこの城を守らせた。亀井武蔵守茲矩は、この時の功績が秀吉に認められ因幡国氣多郡13,800石を与えられ鹿野城主に任せられた。こうして近世初頭に鹿野城主となった亀井武蔵守茲矩は、関ヶ原の合戦以降、城の拡張や城を取り巻く城下の外郭整備を行った。茲矩は、以前からあった山城部の整備を勧める一方、新たに、内堀の外に出丸（現在二ノ丸と称す）を築き、外堀を巡らし、山麓の内堀に囲まれている平坦地には東西の物見を設け、内堀そとの出丸にも東西に櫓を建てるなどし、現在ある近世的城郭形態に至ったようだ。その後、2代目政矩が、1617年石見国津和野に移封されると、鹿野城には独立領主は入らず、また、因伯2国を領した池田光政の重臣日置豊前守の居城として残されたが、1628年の出火により建物は消失し、残った石垣なども一国一城制により1644年にはほとんど破壊されたと伝えられている。こうして

城郭はやがて崩壊の一途をたどり、城下町もしだいに寂れていった。

第III章 調査と結果

第1節 調査の概要

鹿野城は、鹿野の町域の南側お城山（妙見山）に位置し、天守閣のあったと思われる山頂付近で標高150.3mを測る。頂部付近では東西12m、南北12mの平坦面をなし、ここが以前に行われ調査により天守台の跡が確認された場所でもある。また、本丸跡は標高61.8mを測り、現在では造成され鹿野中学校グランドとして使われている。この度行った発掘調査区域では、開発事業が計画されるまで水田として利用されていた。

第2節 調査の結果

鹿野城跡では遺構（主に石垣）の分布範囲を確認するために試掘トレンチを設定した。開発事業の施工期間と調査期間の調整を迅速に図るためA調査区では2ヵ所（50m²）を、B調査区では1ヵ所を（54m²）、C調査区では1ヵ所を（76m²）それぞれ調査した。その結果、A調査区では内堀に面した出角を中心に北と東に伸びる石垣、また、その北に伸びる石垣の延長と思われる石垣の一部を、B調査区では内堀に面して入角を中心に北と西に伸びる石垣を、そして、C調査区では土橋と思われる土層をそれぞれ検出、確認した。

◆A調査区範囲（60m²）

調査区は北が町道二ノ丸線から南に約16～18m付近から、南が町道水谷線より水田に入る進入路付近まで、東が町道水谷線のり面底から、西が内堀を含めて中学校クラブハウス裏付近までの範囲で、現況の標高は南端で55.1m、北端（水田進入路付近）で55.17mを測る。ちなみに調査区南端での堀底及び水面の標高は堀底約51m、水面約52.2mを測る。現況は、水田及び防火用の水槽（内堀）として利用されていた。

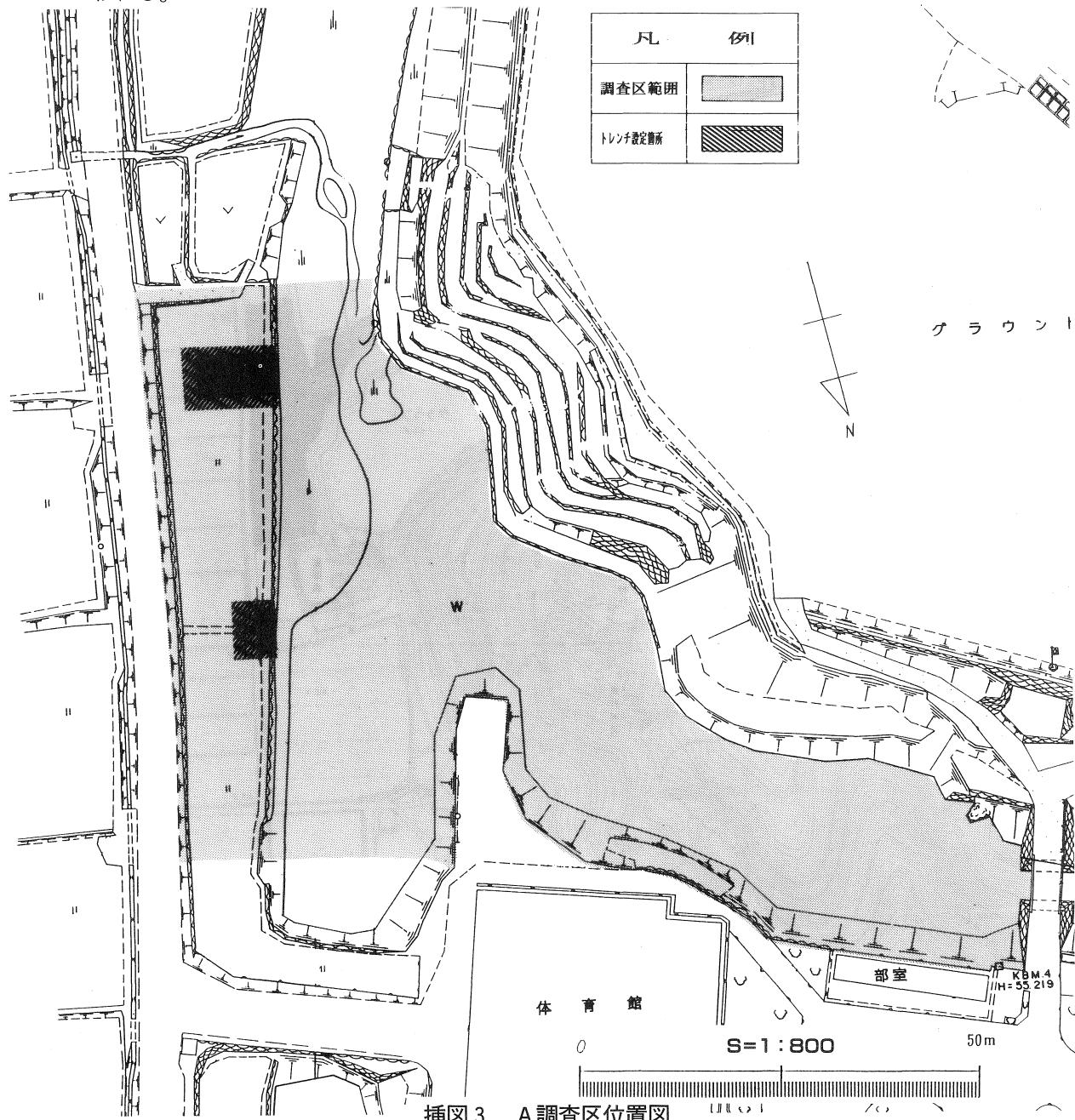
A-T 1

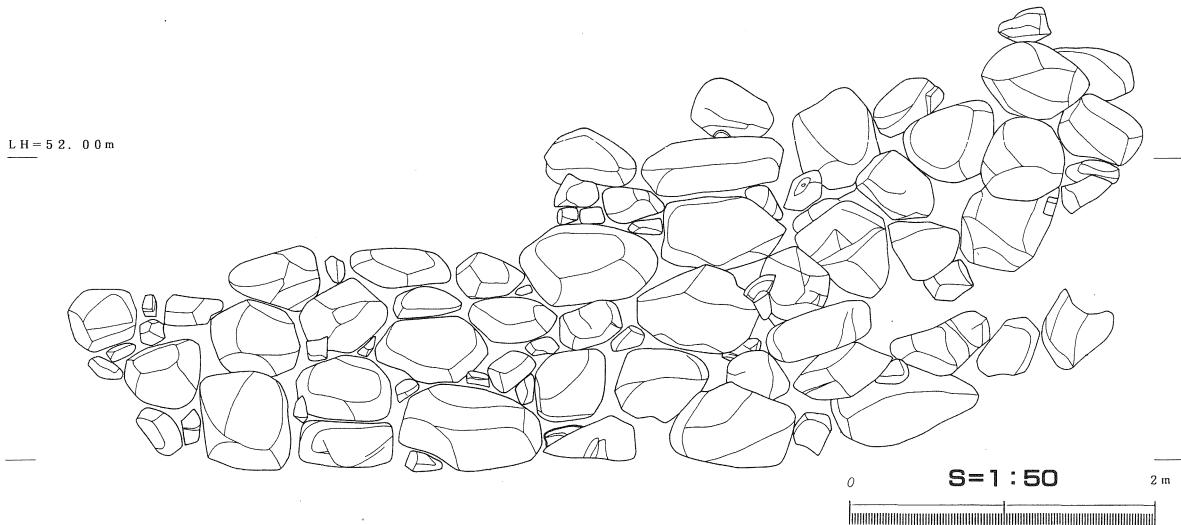
検出全長南北方向に約7.1m、この石垣の残存高は堀底より最低約1.25m、最高約3.1mを検出した。また、築城当時のこの周辺の石積みの天端がどのあたりまであったのか地籍



挿図2 発掘調査位置図

図など詳しい記録が現存していないため不明ではあるが、今回検出した石垣は少ないところで3段、多いところ6段を残している。しかし、6段以上に石垣が積まれていた可能性もあり、1644年の一国一城制により廃城となった後、水田などとして利用された経過もあって、ほとんどが上部数段を欠いているようだ。また、石積みについて観察すると、亀井氏が入城した歴史的背景と今回検出した石垣の構築現況など照合してみると、永禄・天正年間の初期の自然石を割って積みあげた野面積み・打つ込みハギの構築方法ではないかと思われる。

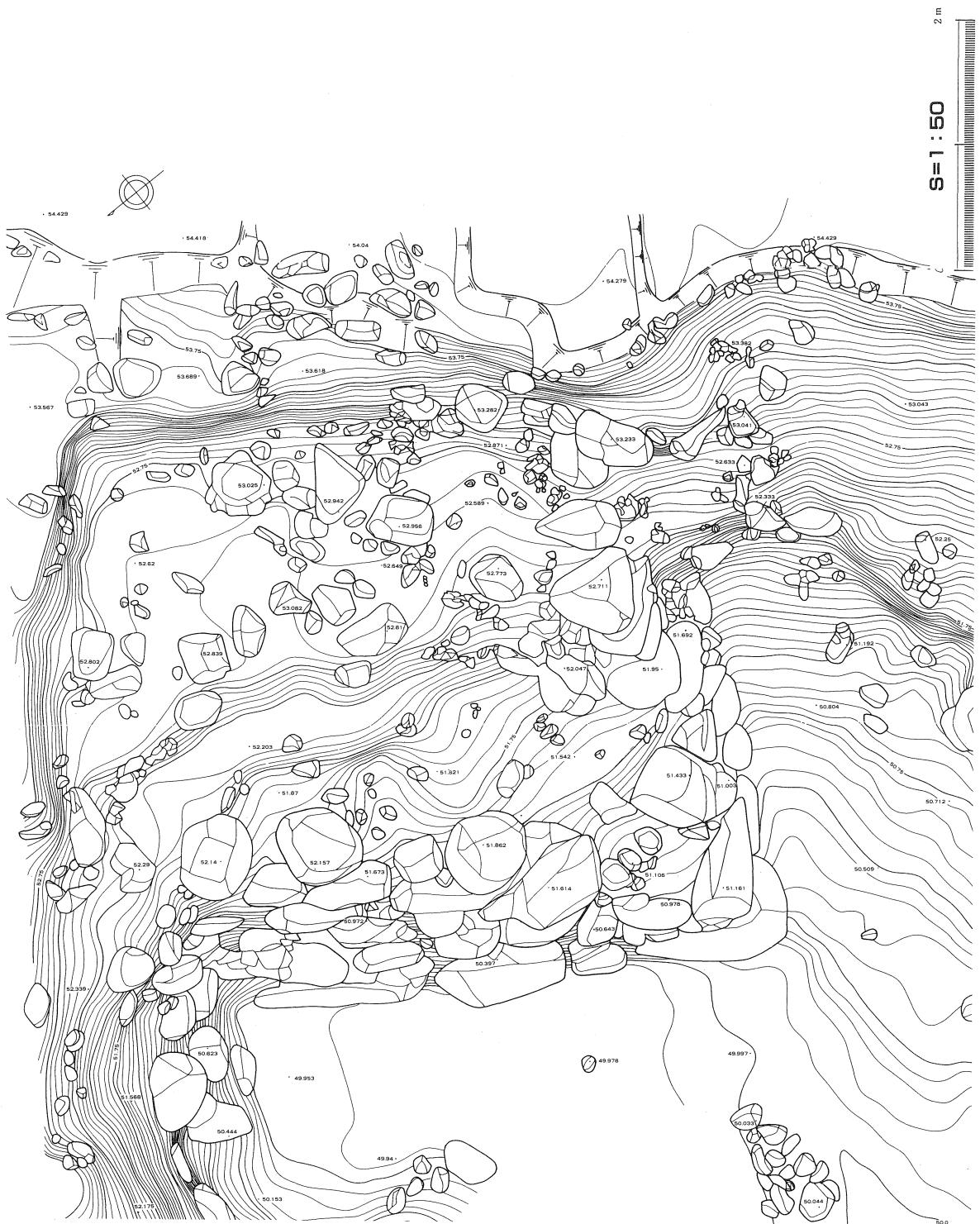




挿図4 A-T 1 検出石垣立面図



挿図5 A-T 2 検出石垣立面図



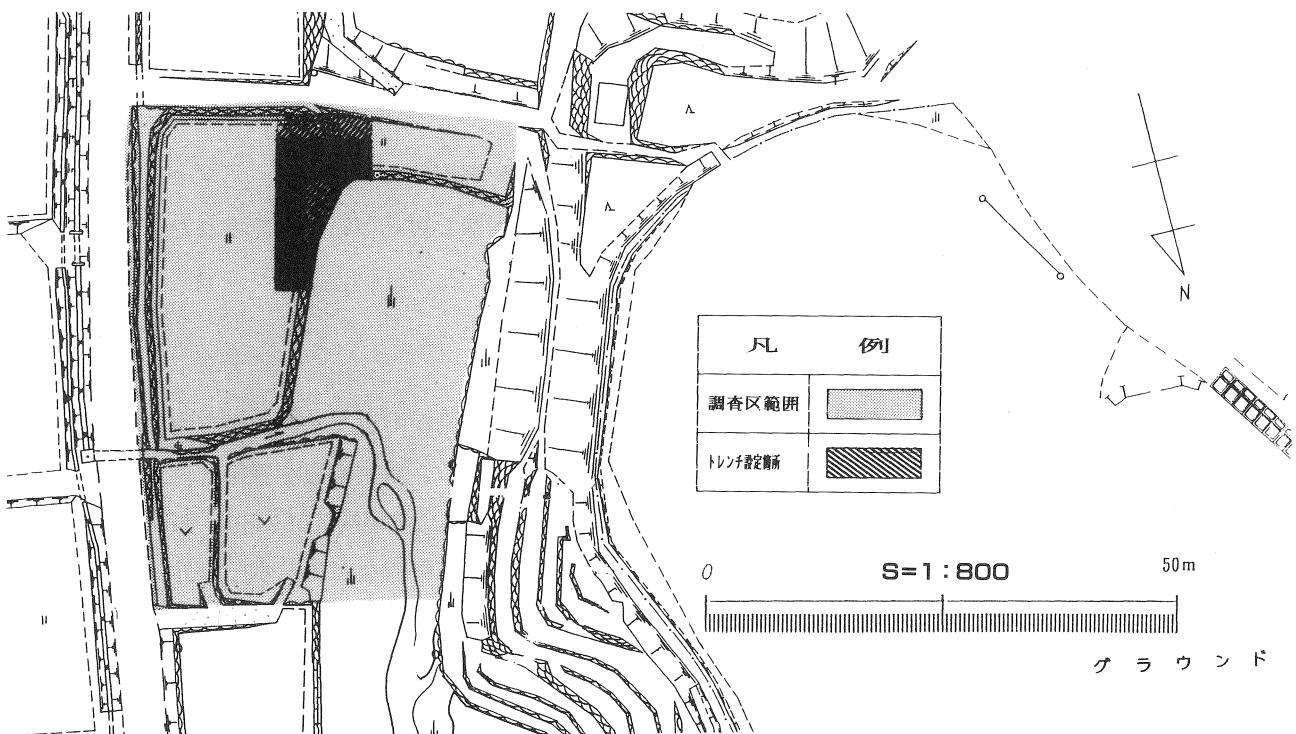
挿図6 A-T2検出石垣平面図

A-T 2

検出全長南北に約4.5m、東西に約3m、この石垣の残存高は堀底より南北方向では最低約1m、最高約2.3mを、東西方向では最低約1.3m、最高約3mをそれぞれ測り検出した。この部分は、A-T 1と同じく天端がどのあたりまであったのか記録がないため詳細は不明だが、検出した石垣は、南北方向の少ないところで2段、多いところで6段を、東西方向の少ないところで2段、多いところで7段をそれぞれ残している。そして、隅角根石を中心に東・北の2方向に伸びる石垣は、隅櫓台の三角形状に出っ張った『出角』である可能性が高く、天端に何等かの構築物があったのではないかと考えられる。また、A-T 1で検出した石垣との位置的な関係を見るとA-T 2で検出した隅角根石より北に伸びる石垣はA-T 1で検出した石垣へとつながり、隅角根石より東方向に伸びる石垣は、本丸下(鹿野中学校グランド) 石垣との関係を縄張りで考えると『横矢掛』の関係にあるように思われる。しかし、隅角根石より東方向にどの程度伸びているのか、町道水谷線崩壊の危険性を考慮し調査を途中で断念したので未確認である。

◆B調査区範囲 (76m²)

調査区は北が町道水谷線より水田に入る進入路付近から、南が薬研堀と内堀を隔てた水



挿図7 B調査区位置図

田まで、東が町道水谷線のり面から、西が堀を含めて中学校グランドから内堀へののり面底までの範囲で、現況の標高は北端（段違いに2区画に別れた水田の町道側）で56.21m、南端で56.59mを測る。ちなみに調査区北端での堀底及び水面の標高は堀底約52.55m、水面約53.1mを測る。現況は、水田及び防火用の水槽（内堀）として利用されていた。

B-T 1

検出全長南北に約8m、東西に約7m、この石垣の残存高は堀底より南北方向では最低約2.3m、最高約2.7mを、東西方向では最低約2.2m、最高約2.6mをそれぞれ測り検出した。また、検出した石垣は、南北方向の少ないところで3段、多いところで7段を、東西方向の少ないところで5段、多いところで7段をそれぞれ残している。そして、この部分は、石垣の構築具合や薬研堀と内堀を隔て本丸（鹿野中学校グランド）へと通じる進入路として近年利用されていたという事実を踏まえて考えると『入角』であった可能性があると思われ、A-T 2と同様天端には何等可の構築物があったことも考えられる。そして、A-T 2で検出した石垣との位置的な関係を見るとB-T 1で検出した『入角』の隅角根石は北方向に伸びる石垣は、そのまま北方向に伸び途中どこかで一端東方向へと入り込み、再び屈折し北方向へと伸びA-T 2で検出した隅角根石より東方向に伸びる未確認の石垣へとつなが可能性があると思われる。また、西方向に伸びる石垣は、当初本丸へと続いているものと考えていたが、『入角』の隅角根石より約7mの地点で薬研堀からの湧水により根石が透かされ崩壊が懸念されたためこれ以上の調査を断念せざるを得なかつたので未確認である。

石垣の構築方法については、自然石を割って積み上げた野面積み・打つ込みハギではないかと思われる。また、南北方向に伸びる石垣の一部が崩壊し裏込の石が確認された。

◆ C調査区範囲 (44m²)

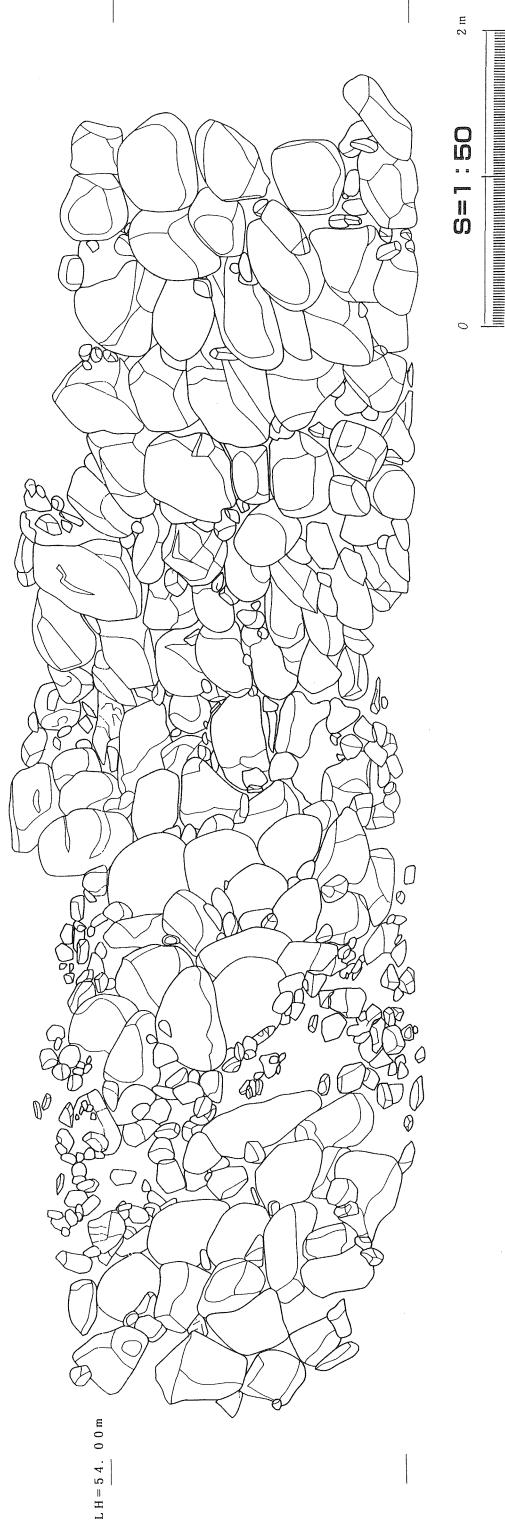
調査区は北が町道二ノ丸線の外堀に面したのり面底から、南が町道二ノ丸線から南に約16~18m付近まで、東が町道水谷線と二ノ丸線の接続地点から、西が町道水谷線と二ノ丸線の接続地点から西に約30~32m付近までの範囲で、現況の標高は東端で56.38m、西端で55.59mを測る。現況は、水田、防火用の水槽（内堀・外堀）、町道などで、水田以外は調査後も利用されている。

C-T 1

この調査区では、石垣などの遺構等の検出はなかった。この部分は、内堀と外堀を隔ており、また、外部から二ノ丸へと進入できる貴重な通路となっていたと思われる。よって、

城を敵から防御するためには石垣などの堅固構築物を形成したのでは外部から一気に侵入され易く、そのため簡易的な構築物（土塁など）を形成し、緊急時にはその簡易的な構築物を瞬時に破壊、撤去し外部と城内とを遮断したのではないかと思われる。

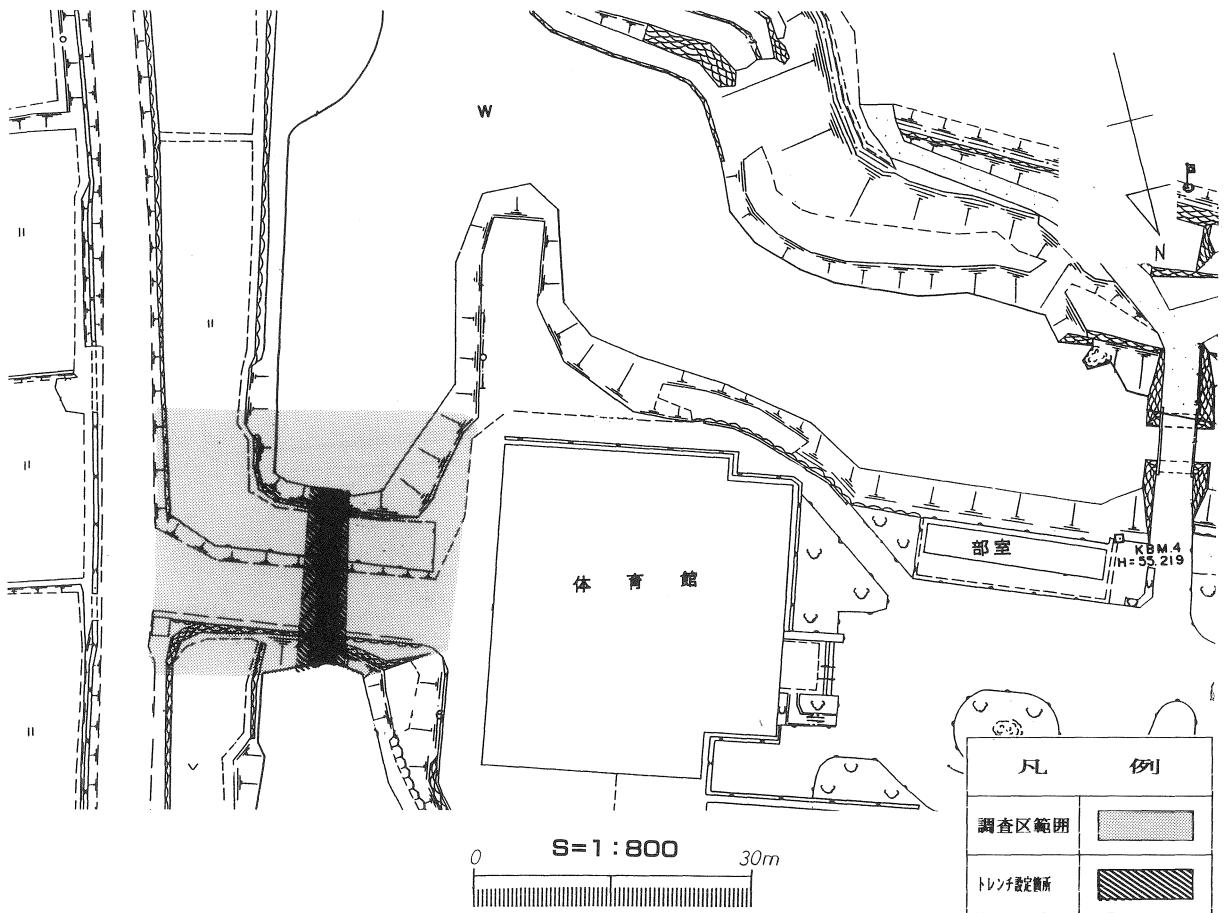
そのような観点から土層断面を細かく観察すると、近年水田などとして利用されてきた経過もあり一部搅乱されているが『版築土塁』と思われる土層を確認した。この土層、粘土質、小砂利、砂質、腐食土、赤土など交互に何層も突き固めてあった。



挿図 8 B-T 1 検出石垣立面図



挿図9 B-T 1 検出石垣平面図



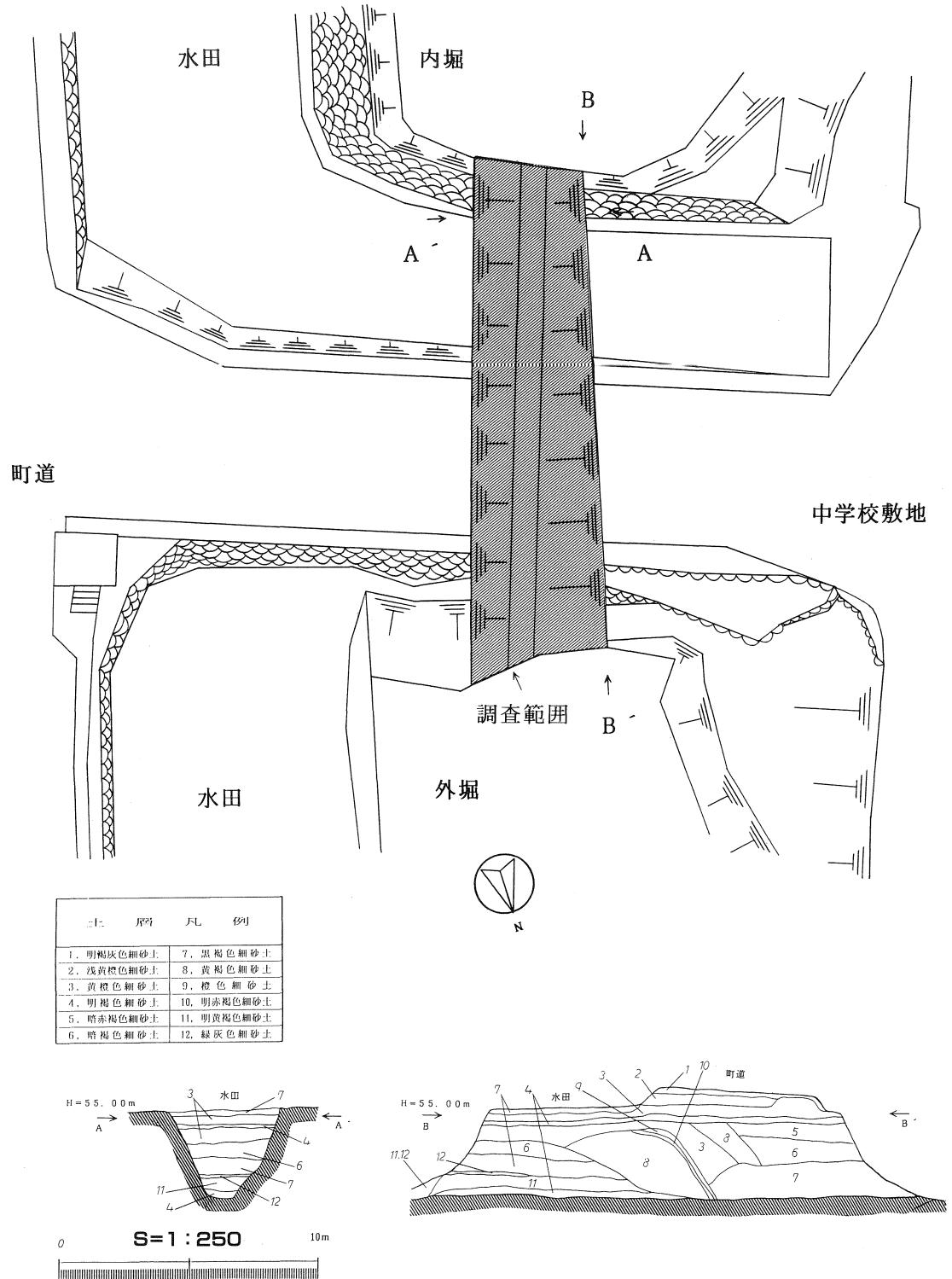
插図10 C調査区位置図

第IV章 まとめ

今回の調査は鹿野城跡という城郭の山麓部に重点をおいて調査をおこなった。調査の結果、A-T 1、A-T 2、B-T 1 でそれぞれ遺構の確認ができ中・近世城館の縄張りを考える上で重要な資料が得られることとなった。

A調査区では、出角が検出されこの検出された出角から北方向へと伸びる石垣と繋がると思われる石垣の確認が、B調査区では、入角が検出されこの検出された入角から東西・南北に伸びる石垣が確認が、C調査区では、遺構等の検出はなかったものの、版築土塁と思われる土層をそれぞれ確認することができた。このうちそれぞれの調査区で検出した遺構と現況の本丸、二ノ丸、内堀について縄張りを考えると、A-T 2 は出角、B-T 1 は入角、内堀を挟んで本丸下現存する石垣とは A-T 2 の出角は横矢掛りの関係にあるようと思われる。

鹿野城については記述された古文書のなかで、亀井氏が統治した時代のものはなく、全て後世に記されたもので、城郭の全容は定かではない。



挿図11 C-T 1 平面図及検出土層断面図

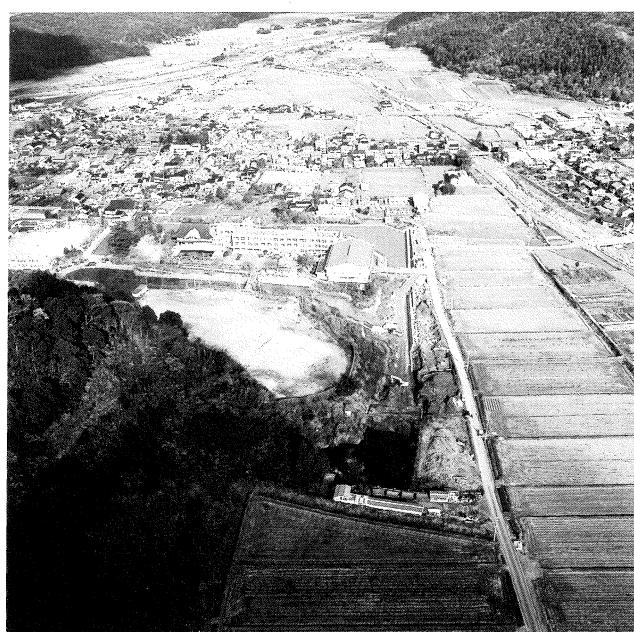
今回の調査で検出された遺構は、構築方法、縄張りなどから見て亀井氏が入城してからの城の拡張時に築かれた石垣及び土塁と推測される。

図 版

図版1 調査区全景（東側より）



図版2 調査区全景（南側より）



図版3 A工区検出石垣全景



図版4 B工区検出石垣全景



図版5 A-T-1検出石垣（東立面）



図版6 A-T-1検出石垣（平面）



図版7 A-T 2検出石垣（東立面）



図版8 A-T 2検出石垣（南立面）



図版9 A-T 2 検出石垣（平面）



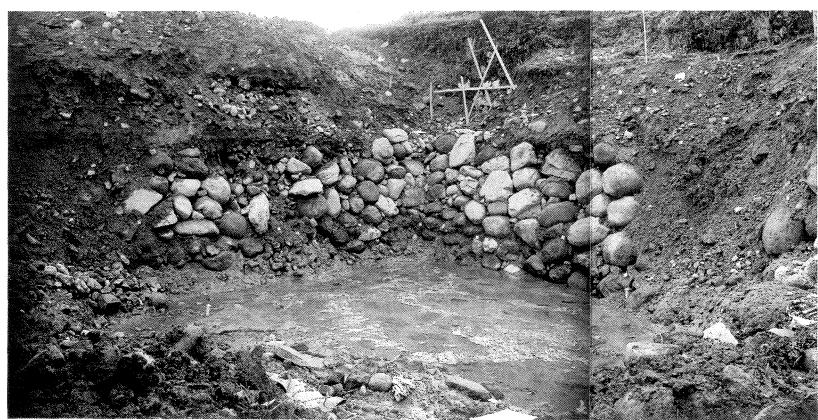
図版10 A-T 2 検出石垣（隅石中心）



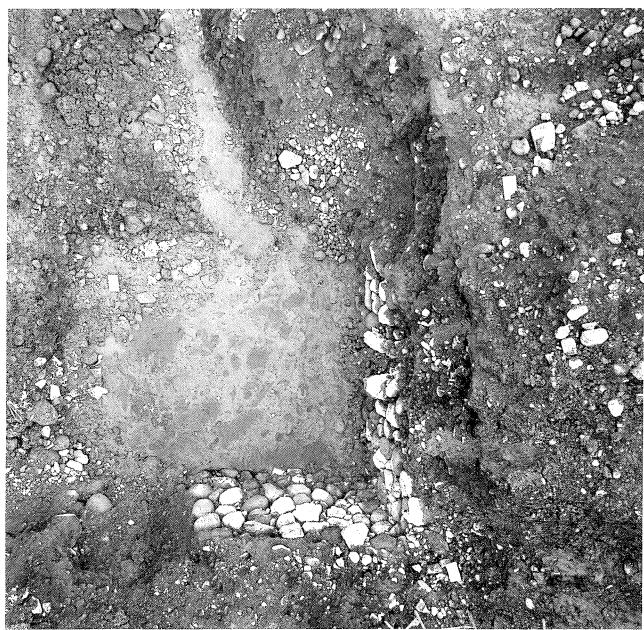
図版11 B—T 1 検出石垣（東立面）



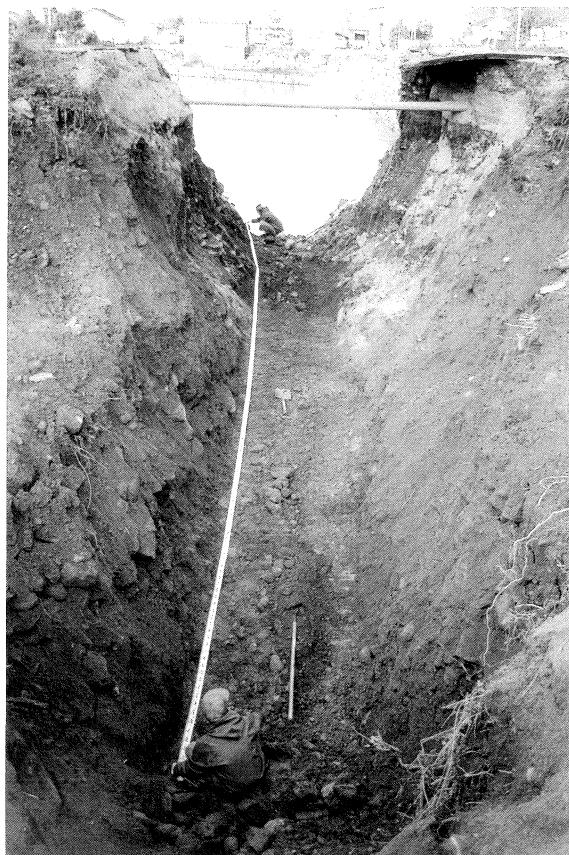
図版12 B—T 1 検出石垣（隅石中心）



図版13 B—T 1 検出石垣（平面）



図版14 C—T 1 土層断面（A—A'）



図版15 C-T1土層断面 (B-B')

